

## 終助詞「ネ」「ヨ」再考—先行研究統合の試み—<sup>1</sup>

英国ダラム大学東洋学部 西郷英樹

Hideki Saigo, Department of East Asian Studies, University of Durham

hideki.saigo@durham.ac.uk

### 1. はじめに

終助詞「ネ」「ヨ」についてはこれまで数多くの研究がなされ、さまざまな説明が提案されてきた。これらの先行研究はどれも「ネ」「ヨ」の特徴をよく捉えていると言えるが、「ネ」「ヨ」の核となる機能に関してはまだ議論の余地がありそうである。本研究ではその点を探っていききたい。<sup>2</sup>

### 2. 先行研究

本稿では「ネ」「ヨ」に関する数多くの研究の中から、それらの機能を体系的に説明している研究をいくつか取り上げ、以下の様にまとめた。<sup>3</sup>

- A. 情報一致に基づく説明：話し手と聞き手の情報が一致しているかどうか<sup>4</sup>
- B. 情報帰属に基づく説明：当該の情報が話し手と聞き手のどちらに帰属しているか（心理的に近いか）
- C. 情報受容に基づく説明：話し手が当該の情報をどのくらい受容しているか

では、これら3つの異なった説明を以下考察していく。

#### 2-1 3つの異なる説明

- A. 情報一致に基づく説明（大曾 1986、陳 1987、益岡 1991 など）

情報一致に基づく説明では、ある事柄に関して話し手と聞き手が保有している情報が同じ場合は「ネ」、異なっている場合は「ヨ」が用いられると説明している。

- (1a) 「面白い映画だったネ。」

状況：映画館を出た A が一緒に映画を見た B に言った。

説明：A は B も「映画が面白かった」という情報を持っていると思っている。

- (1b) 「面白い映画だったヨ。」

状況：一人で映画を見てきた A が友人の B に言った。

説明：A は B が「映画が面白かった」という情報と異なる情報を持っていると思っている。

- B. 情報帰属に基づく説明（神尾 1990、メイナード 1987、Oishi 1985 など）

情報帰属に基づく説明では、当該の情報が心理的に聞き手に近い場合は「ネ」、話し手に近い場合は「ヨ」が用いられると説明している。

- (2a) 「九州はいい所だネ。」

状況：九州へ始めて来た A が九州出身の B に言った。

説明：A は九州に関する情報は B に帰属している（心理的に B に近い）と思っている。

<sup>1</sup> 口頭発表後、林四郎先生、蓮沼昭子先生をはじめ複数の先生方から建設的なコメントを頂いた。本稿の内容は発表内容とほぼ同じであるが、「ネ」「ヨ」の機能の「再」再考を今後の課題としたい。

<sup>2</sup> 本稿では紙幅の都合上、議論を陳述文に限定し依頼文や質問文には触れない。依頼文、質問文に現れる「ヨ」の機能については拙論 Saigo (2002)を参照されたい。

<sup>3</sup> 本稿ではそれぞれの先行研究の細部まで議論するという方法はとらず、それぞれの主要議論がほぼ共通するものと同じに基づく説明として扱った。

<sup>4</sup> 本稿では「情報」をいわゆる真偽の対象となる知識 (knowledge) だけでなく、話し手や聞き手の判断 (judgment) や意向 (intention) なども指し示すものとする。

(2b) 「九州はいい所だヨ。」

状況：九州に行った事がないAに九州出身のBが言った。

説明：Bは九州に関する情報は自分に帰属している（心理的に自分に近い）と思っている。

以上の2つの異なる説明は共に、話し手と聞き手の情報分布の仕方によって「ネ」「ヨ」の使用が決定されるという点でまとめられる（金水・田窪 1998）。では、3つ目の説明を見てみよう。

### C. 情報受容に基づく説明（片桐 1995）<sup>5</sup>

情報受容に基づく説明では、話し手が当該の情報をまだ完全に受容していない時に「ネ」、既に完全に受容している時は「ヨ」が用いられると説明している。

(3a) 「今日の巨人阪神戦は6時からだネ。」

状況：野球の試合の開始時刻をはっきり覚えていないAがBに言った。

説明：Aは試合開始時刻をまだ完全に受容していない（うろ覚え）。

(3b) 「今日の巨人阪神戦は6時からだヨ。」

状況：野球の試合の開始時刻を聞かれてAがBに言った。

説明：Aは試合開始時刻を既に完全に受容している（自分の記憶に自信がある）。

この説明は、前述の2つの説明とは異なり、「ネ」「ヨ」は話し手と当該の情報との関係のみを指標し、聞き手がどのように当該の情報を捉えているかに焦点を当てていない。

以上、3つの説明の概要を見てきたが、これらの説明はそれぞれに「ネ」「ヨ」を違う観点から捉え、「ネ」「ヨ」の異なった特徴をうまく説明していると思われる。しかし、本稿では「ネ」「ヨ」の核となる機能は他にあると考える。では、その核となる機能とは一体どのようなものか。また、前述の3つの異なる説明は何を示しているのだろうか。これらについて、以下考察していく。

## 3. 新仮説

### 3-1 会話基盤導入指標としての「ネ」「ヨ」

会話とは、話し手が発話を通して聞き手に自分の情報を伝えることだと言える。当たり前であるが、話し手が聞き手に伝える前の情報は話し手だけのものである。つまり、聞き手は当該の状況で話し手がどのような情報を自分に伝達してくるか分からないのである。そして、話し手が聞き手にその情報を伝えた後、初めてその情報は話し手と聞き手が参加している会話の基盤になりえる。しかし、話し手は自分の情報をただ単に聞き手に伝えてそれを会話基盤にしているわけではない。何らかの信号を自分の情報に付加し、どのように自分の情報を聞き手との間の会話基盤にしようとしているかを示していると考えられる。本研究では「ネ」「ヨ」もこのような信号の一部だと考え、以下のように提案する（Sは話し手、Hは聞き手を指す）。

SがHと共に発話情報を会話基盤にしようとする時に「ネ」を用いる<sup>6</sup>

Sが一方的に発話情報を会話基盤にしようとする時に「ヨ」を用いる

例えば、AさんがBさんに「田中さんの足は大きい」という情報を伝えようと考えているとしよう。

<sup>5</sup> 認知言語学の発展が「ネ」「ヨ」の研究にも波及し、90年代初めまで主流だった「話し手と聞き手の情報分布」という考え方に捕われない新しい考えが90年代に入り提案されはじめている。本稿で取り上げている片桐（1995）の他に金水・田窪（1998）、蓮沼（1996）、小野・中川（1997）などがその例である。これらの議論に共通することは、「ネ」「ヨ」の機能を「認識・知識が形成される際に発動される心的操作の表示」（蓮沼 1996：383）だと考えていることである。本稿での提案とこれらの提案がどのように結びつくのかを見ていくことも今後の重要な課題の一つである。

<sup>6</sup> 本稿で用いられる「会話基盤」という概念の詳しい議論は Clark（1996）を参照されたい。

もしAがBと共にこの情報を会話基盤にしようとしているならば「ネ」を付加し（4a参照）、一方的にその情報を会話基盤にしようとしているのであれば「ヨ」を付加するのである（4b参照）。

(4a) 「田中さんの足は大きいネ。」

(4b) 「田中さんの足は大きいヨ。」

この提案を用いて前述の3つの異なる説明を統合することができるのではないだろうか。まず始めに「ネ」の場合を考えてみよう。話し手が聞き手と共に発話情報を会話基盤にしようとする典型的な時とは、(A) 話し手と聞き手の情報が同じ時（情報一致に基づく説明）、(B) 情報が聞き手に帰属している時（情報帰属に基づく説明）、または (C) 話し手が情報をまだ完全に受容していない時（情報受容に基づく説明）だと言えよう（図1参照）。

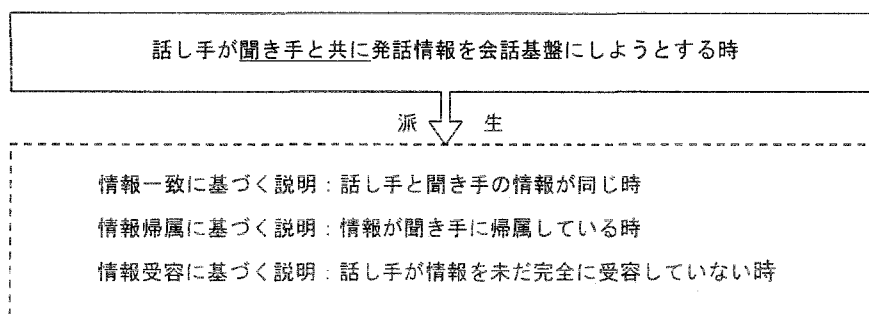


図1. 「ネ」に関する先行研究と新提案との関係

次に「ヨ」であるが、話し手が一方的に発話情報を会話基盤にしようとする典型的な時とは、(A) 話し手と聞き手の情報が異なっている時（情報一致に基づく説明）、(B) 情報が話し手に帰属している時（情報帰属に基づく説明）、または (C) 話し手が情報を既に完全に受容している時（情報受容に基づく説明）、であると言えよう（図2参照）。

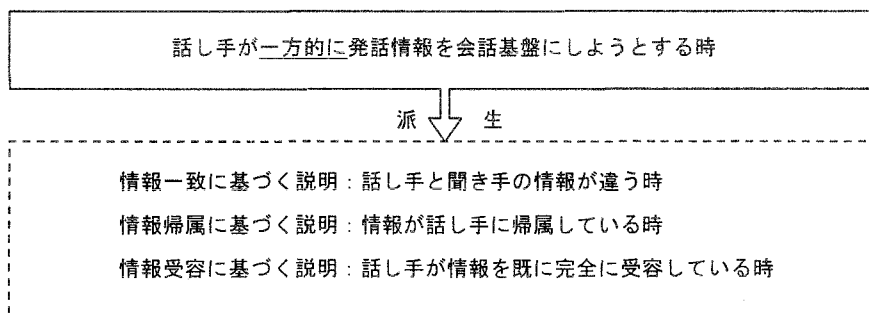


図2. 「ヨ」に関する先行研究と新提案との関係

このように考えると、前述の3つの異なる説明が示していたものは、「ネ」「ヨ」の核となる機能ではなく、「ネ」「ヨ」が典型的に現れる状況であったと言えるのではないだろうか。

### 3-2 話し手が「ネ」「ヨ」を用いる理由

3-1では、会話基盤という概念を用いて、「ネ」「ヨ」の機能を提案した。しかし、提案された説明だけでは、なぜ話し手が自分の発話情報を会話基盤にしようとする方法を聞き手に示すのか分からない。つまり、話し手が「ネ」「ヨ」を使う理由が何であるか答えていないのである。本稿では話し手が「ネ」「ヨ」を使う理由は話し手が自分の発話の後に聞き手から特定の返答を引き出そうとし

ているからだと考える。<sup>7</sup> この点を考慮に入れて、3-1での提案を以下の様に修正し、それを本稿で提案する新仮説としたい。

Sが発話情報を会話基盤とすることへの受諾をHに求める時、「ネ」を用いる

Sが発話情報を会話基盤と受諾した上での応答をHに求める時、「ヨ」を用いる

では、例(5)～(9)を通して修正された新仮説を見ていこう。

(5) A「ちょっと、見て。あの人怪しいネ。」

B「あ、本当だ。」(受諾)

状況：友人AとBが電車に乗っている時、挙動不審の人がいた

(5)のやりとりで、Aがまず始めに「あの人は怪しい」という情報をBに発している。その情報にAは「ネ」を付加している。これはこの情報を会話基盤とすることへの受諾をBに求めているからである。Aの発話を受けて、Bは「Aが言ったことは本当だ」という情報を発し、受諾を表明している。

(6) 刑事「あのう、田中さんですネ。」

田中「ええ、そうです。」(受諾)

状況：ある殺人事件の目撃者である田中と刑事が喫茶店で待ち合わせした

(6)のやりとりも(5)と同様に、Aは「あなたは田中だ」という情報をBに発し、「ネ」を付加している。これはこの情報を会話基盤とすることへの受諾をBに求めているからである。Aの発話を受けて、Bは受諾(「ええ」)を表明している。

(5)及び(6)のやりとりを見て分かるであろうが、先行研究や日本語の教科書では(5)での「ネ」の機能を「同意を求める「ネ」、そして(6)でのそれを「確認を求める「ネ」と異なった説明をしている。しかし、「当該の情報を会話基盤とすることへの受諾」という考えはこれら2つの異なる説明をまとめ上げることができよう。つまり、「命題への同意を求める」「命題への確認を求める」といった2つの説明は、「発話情報を会話基盤とすることに対して聞き手から受諾を求める」という機能を持つ「ネ」とそれが使われた文脈が組み合わさって出てくる副次的な意味だと言える。

次に(7)(8)のやりとりを見てみよう。

(7) A：「雨が止んだヨ。」

B：「じゃあ、行こうか。」(受諾した上での応答)

状況：AとBが喫茶店で雨宿りをしていた

AがBに「雨が止んだ」という情報に「ヨ」を付加している。これは、Aが発話情報を会話基盤と受諾した上での応答をBに求めているからである。Bの発話の「じゃあ」は受諾と考えられ、「行こうか」はAの発話を会話基盤とした上での応答だと考えられる。

(8) A：「明日、暇？」

B：「暇だヨ。」

A：「本当！じゃあ、映画見に行かない？」(受諾した上での応答)

<sup>7</sup> この説明を用いて、なぜ「ネ」「ヨ」が新聞の記事や論文などには現れずに、対話で頻繁に現れるのかという疑問にも答えることができよう。つまり、新聞の記事や論文など読み手からの即座の応答を意図していないものには「ネ」「ヨ」は現れないのである。個人的な手紙や電子メールのやり取りなどには「ネ」「ヨ」が現れることがある。これは書き手が「ネ」「ヨ」を用いて読み手から即座の応答を求めているような効果を意図しているからであろう。

状況：AがBを映画に誘っている

まず初めにAがBに明日暇かどうか聞いている。その返答として、Bが「明日は私は暇だ」という情報に「ヨ」を付加している。これは、Bが自分の発話情報を会話基盤と受諾した上での応答をAに求めているからである。つまり、BはAが自分にそのような質問をした理由を次に言うようにAに促しているのである。Bの「返答」を受け、AはBを映画に誘っている。Aの発話の「本当？じゃあ」は受諾を表し、「映画を見に行かない？」はAの発話を会話基盤とした上での応答だと考えられる。

最後のやりとりとして、魚屋の売り込みを考えてみよう。魚屋が店の前を通りかかった人に「今日は秋刀魚が安い」という情報を伝えたいとしよう。その場合、どのように伝えるのであろうか。まず考えられるのは、裸文末の「ゼロ」である（発話9a参照）。

(9a) 「奥さん、今日は秋刀魚が安い。」

しかし、「ゼロ」の発話は売り込みとしてどうであろうか。独り言を言っているような印象を受けはしないか。これは「ゼロ」が「ネ」や「ヨ」と違ってそれだけでは聞き手から応答を引き出す効力がないからだと考えられる。では「ネ」はどうか（発話9b参照）。

(9b) 「奥さん、今日は秋刀魚が安いネ。」

「ネ」の発話もあまりしっくりこないようだ。これは自分の発話情報を会話基盤とすることへの受諾を秋刀魚が安いという事実を知らない人から求めるのがそもそも変であるからであろう。また秋刀魚が盛られたざるの前に書かれた値段を指差しながら「奥さん、今日は秋刀魚が安いネ。」とも言わないであろう。これは通り掛かりの人に自分の発話情報を会話基盤とすることへの受諾を求めたところで秋刀魚を買ってほしいという魚屋の気持ちが上手く伝わらないからであろう。魚屋は秋刀魚を売り込むためには「ヨ」を用いて、自分の発話情報を受諾した上での応答を聞き手に求めなければならないのである（発話9c参照）。

(9c) 「奥さん、今日は秋刀魚が安いヨ。」

「ヨ」の効力を受けて、買い物客は「じゃ、一皿もらっていくわ。」「まだ家に鰹が残っているのよ。」などと答えるであろう。

#### 4. 日本語教育との関連

「ネ」「ヨ」は日本語初級レベルで導入される文法項目である。それにも関わらず初級の学習者は言うに及ばず中上級になってもこれらの終助詞を上手く使いこなせる学習者は少ない。「ネ」の使用に関しては、「そうですネ。」など慣用化された句の習得は早いですが、自分で作り出した情報（命題）に「ネ」を上手に付加するのは難しいようだ（Yoshimi 1999）。また西川（2000）が指摘しているように「ヨ」の使用に関しては、上手に使えないというよりも、全く使わない学習者の方が多いのではないだろうか。

学習者が上手に「ネ」「ヨ」を使いこなせない理由として、少なくとも以下の3つの原因が考えられよう。

- ① 対話に特有の「ネ」「ヨ」の運用能力はそうではない文法項目と比べて習得が難しい。
- ② 参考書や教科書におけるこれらの終助詞の説明が抽象的で学習者に分かりにくい。
- ③ 教室活動でのこれらの指導が疎かになっている。これは「ネ」「ヨ」の重要性が十分に認識されていないということもそうだが、それよりも対話という言語活動そのものの特異性がまだきちんと把握されていないことの方がより重要な問題であるかもしれない。

本稿で提案した新しい「ネ」「ヨ」の説明が2つ目の問題解決に少しでも役に立てば幸いである。

特にこれまでの「ヨ」の説明の多くは非常に抽象的(大曾 1986)で‘対話の中でなぜ話し手が「ヨ」を使用するのか’という点が学習者にはほとんど分からなかったように思える。‘話し手が自分の発話の後、どのような発話を聞き手に求めているのか’という観点から本稿で提案した説明はこれまでの説明に比べ、より具体的に「ヨ」の機能が示されていると考える。

しかし、「ネ」「ヨ」の機能をより正確に捉えるに当たって考えなければならない点はまだ数多くある。自然発話を用いて本稿で提案した仮説の妥当性を検証する必要性は言うに及ばず、その他にも、

- ①依頼文、疑問文に現れる「ネ」「ヨ」の機能
  - ②イントネーション
  - ③ノダ構文と「ネ」「ヨ」が組み合わさった形(「～んですね」「～んですよ」)の機能
  - ④間投用法の「ネ」「ヨ」(「昨日ネ、田中さんと会ったよ。」)
  - ⑤他の終助詞や文末形との係わり合い
  - ⑥言語的ポライトネスとの係わり合い
- などを研究していく必要があると考える。

#### 引用文献

- (1) 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいいい天気ですね。』 - 『はい、そうです。』」 『日本語学』 第 5 巻第 9 号, 91-94.
- (2) 小野晋・中川祐志 (1997) 「階層的記憶モデルによる終助詞『よ』『ね』『な』『ぜ』『ぞ』の意味論」 『認知科学』 第 4 巻第 2 号, 39-57.
- (3) 片桐恭弘 (1995) 「終助詞による対話調整」 『言語』 第 24 巻第 11 号, 38-45.
- (4) 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 - 言語の機能的分析』 大修館書店
- (5) 金水敏・田窪行則 (1998) 「談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究」 堂下修司・新美康永・白石克彦・田中穂積・溝口理一郎 (共編) 『音声による人間と機械の対話』 オーム社, 257-269.
- (6) 陳常好 (1987) 「終助詞 - 話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞 -」 『日本語学』 第 6 巻第 10 号, 93-109.
- (7) 西川弘達 (2000) 「終助詞『よ』使用に関する学習者の意識」 『南山大学国際教育センター紀要』 創刊号, 195-207..
- (8) 蓮沼昭子 (1996) 「終助詞『よ』の談話機能」 『言語探求の領域 - 小泉保博士古稀記念論文集』 大学書林, 383-395
- (9) 益岡隆志 (1991) 『モダリティーの文法』 くろしお出版
- (10) メイナード・K・泉子 (1987) 『会話分析』 くろしお出版
- (11) Clark, H. (1996) *Using Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- (12) Oishi, T. (1985) *A Description of Japanese Final Particles in Context*, Unpublished Ph.D diss., University of Michigan.
- (13) Saigo, H. (2002) Reanalysis of the Japanese sentence-final particle *yo*. *BATJ Journal* No. 3, 1-10.
- (14) Yoshimi, D. R. (1999) L1 language socialization as a variable in the use of *ne* by L2 learners of Japanese. *Journal of Pragmatics* 31, 1513-1525.